［2020（令和2）年度　本願寺国際センターゼミナール（惠範講座）］

コロナ禍と真宗

浄土真宗本願寺派総合研究所副所長　満井秀城

皆さん、こんばんは。急に寒くなってまいりましたし、また新型コロナウイルス感染が非常に難しい中で、ご参加くださいまして誠にありがとうございました。ご紹介いただきました満井でございます。限られた時間、またさまざまな制約がございますけれども、若干の私の思いを述べさせていただき、皆さま方のご参考になればと思っているところでございます。

まず、親鸞聖人や蓮如上人がどのようなお考えであったかということをたずねさせていただくことを基本に窺っていきたいと思います。

言うまでもなく、親鸞聖人、蓮如上人の時代にコロナウイルスであるとか、インフルエンザウイルスであるとか、そういう科学的な知見はなかったわけですが、しかし疫病がはやったり、飢饉があったりということはいつの時代も起こっていたことです。そのような中にあって、親鸞聖人や蓮如上人がどのような対応を取ってこられたかということを、『御消息』と『御文章』を通して確認し、それが今の時代の私たちにおいて、いかなる意味や意義を投げ掛けてくださっているのかというところを、前半にお話をさせていただき、休憩時間の後に今の私たちがどのような在り方を考えられるかという提案をさせていただきます。

まず『御消息』に目を通させていただきます。「なによりも去年・今年」[1]、これは去年が１２５９年、今年は１２

６０年という年になるわけです。「老少男女おほくのひとびとの、死にあひて候ふらんことこそ、あはれに候へ」。この１２５９年、１２６０年は伝染病が起こったり、飢饉があったりといったことで、多くの人々が亡くなっている。これは誠に言語に尽くし難いというわけです。

ただし、「生死無常のことわり、くはしく如来の説きおかせおはしまして候ふうへは、おどろきおぼしめすべからず候ふ」。これが親鸞聖人の、疫病などの受け止め方の一つの基本だと理解できると思います。聖人はここで何をおっしゃっているかというと、生死無常のことわりというのは、かねて釈尊、お釈迦様がお説きくださっていることわりであって、また、さまざまな経験の中で多くの人もそのことをご存じでありましょうと言われるわけですね。

この境涯は、明日が保証されていない無常の境涯であるということを、まず親鸞聖人は、今更驚くべきことではないと言われます。一見突き放したような言い方をなさっておられるようにも見えますけれども、しかしよくよく考えてみると、私たちは生まれたからには必ず死にます。死ぬということの原因は何かと言うと、生まれたから死ぬということであります。死にたくなかったら生まれなければいい。身もふたもないような言い方かもしれませんが、人間、生を受けたからには、いつかは必ず死ななければならないということは、かねてお釈迦さまがおっしゃっているとおりである。有史以来、お釈迦さまがお説きくださって以来、こんにちに至るまで、この基本的な原則から逃れ得た人は誰一人いないわけです。従って、多くの人が病気で亡くなっている。悲しいし、やりきれない思いはするんだけれど、しかし、生まれたからには必ず死ぬということは避けて通れない。それはかねてお釈迦さまがお説きくださっていることなんだから、そのことをきちっと見定めなさいよということを、冒頭で私たちに、あるいは直接的にはこのお手紙の宛先の方になりますが、仰っている。このような普遍的な意味を持って、私たちも受け止めさせていただかなければならないと思います。

その後に、「まづ善信（親鸞）が身には」、つまり親鸞聖人ご自身の思いとすれば、「臨終の善悪をば申さず、信心決定のひとは疑なければ正定聚に住することにて候ふなり」。この法義はかねてご聴聞のとおりだと思います。親鸞聖人の信仰内容、お領解の内容とすれば、臨終における善悪ということは問題にしないのだ。信心決定の身において、聞信の一念において、必ず浄土に往生することが決定した仲間、これを正定聚、まさしく決定した仲間に住すると、親鸞聖人は、かねてご自身も領解されておられると同時に、門弟方にずっと言い続けてこられたことです。「さればこそ愚痴無智の人も」。どのような凡夫、悪人であったとしても、「をはりもめでたく候へ」。つまり、いのちを終えていくという事態になったら、これは単なる敗北ではないんですよと。正定聚に住したものとしては、浄土に往生するということで目的が完結するという意味において、めでたいことであると仰います。「如来の御はからひにて往生するよし、ひとびとに申され候ひける、すこしもたがはず候ふなり」。これは、全て他力のはたらきによって、聞信の一念において、正定聚の位に住し、いのち終わったときには浄土に往生する。かねてより阿弥陀さまのおはたらき、おはからいであり、そして、そのことをお示しくださったお釈迦さまのお示しのとおりである。「としごろ、おのおのに申し候ひしこと、たがはずこそ候へ」。お弟子の方々に、あるいは門弟の方々に常日ごろ申し上げてきたこともそのとおりである。「かまへて学生沙汰せさせたまひ候はで」。学生沙汰というのは、小ざかしい理屈などせずに、如来のおはたらきのように浄土に往生させていただく身であると。そういうお手紙になっております。

次に『御文章』4帖目の9通、一般に疫癘の章と言われる『御文章』[2]を見てみましょう。「当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す」。疫病、伝染病ということで多くの人が亡くなっている。「これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず」、多くの人たちが疫病によって死んでいるとおっしゃりながら、しかし、こういう方々は疫癘で死んだのではありませんということですね。「生まれはじめしよりして定まれる定業なり」。生まれた

からということは死ぬこと決定していることである。「さのみふかくおどろくまじきことなり」、そんなに驚くべきことではない。これは、先ほどの親鸞聖人の『御消息』とほぼ同一と考えていいですね。多くの人が伝染病で亡くなっている。しかし、それは伝染病で死んだのではない。生まれたから死んだのだ。これは驚くべきようなことではないとなっています。「しかれども、いまの時分にあたりて死去するときは」。この当時においては病気によって亡くなっていると考えるのも、「さもありぬべきやうにみなひとおもえり」。それもそのとおりだろうと。みんなそう思っている。「これまことに道理ぞかし」。これも誠に道理であろうと。つまり、多くの人々が生まれたから死ぬというふうに割り切れていなくて、病気によって亡くなったということの無常を味わわれるのも、これも道理であろう。凡情に寄り添っておられるとうかがうことができます。「このゆゑに阿弥陀如来の仰せられけるやうは、『末代の凡夫罪業のわれらたらんもの、罪はいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくふべし』と仰せられたり。かかるときはいよいよ阿弥陀仏をふかくたのみまゐらせて、極楽に往生すべしとおもひとりて、一向一心に弥陀をたふときこと、疑ふこころ露ちりほどももつまじきことなり」。

つまり、伝染病ということに焦点を当てて考えた場合、親鸞聖人の『御消息』においても、また蓮如上人の『御文章』においても、「おどろきおぼしめすべからず候ふ」、あるいは「おどろくまじきことなり」とあります。『御消息』について言えば、今更びっくりするようなことではないとおっしゃったのちに、現生正定聚の法義を述べられておられます。これは死に方を問わないということをおっしゃっている。だから、臨終の善悪を沙汰しない。臨終においてどういう死に方をしたかということが、自身の往生には関わりない。「臨終待つことなし、来迎たのむことなし」。常々、そうおっしゃっていた親鸞聖人のお言葉を思い出すわけですね。つまりは死に方を問わないということを親鸞聖人はお示しくださっているわけです。どういう死に方が待っているか分からない。しかし、どういう死に方をしたとしても、私たちは正定聚不退の位として必ず浄土に往生し、悟りを得ることが決定していると

いうことです。

私があえてこのことを強調したかったのは、死に方を問わないということは、私たちは今の時代におきましても、特に留意すべきことではないかと思っています。自死、自殺者への偏見を解きほぐすことになり得るという論理が、ここに示されているように思うわけですね。お互いどんな死に方をするか分かりませんけれども、死に方を問わないのが浄土真宗の法義というものであります。

私は両親とも心筋梗塞で亡くしました。前の日までどちらも元気であったのが、翌朝になったら、ということでありました。だから、私もたぶんいいものを持っているんであろうと思います。

それから、あまり人前で言うべきことではないんですが、私は車の運転が少し荒いんです。むちゃくちゃな、粗暴な運転はしていないつもりなんですが、助手席に乗っている妻から見るとどうも荒く映るらしく、あなたが死ぬときは心筋梗塞か交通事故だから、気を付けてくださいよと言ってくれるんです。

私は素直な人間ではないので、いや、浄土真宗は平生業成だから死に方を問わないんだよ、と言うんです。すると妻が「私はそんなことを言っているのではありません」と言って、むくれるんですけれども。死に方を問わないという法義、これはとても大事な視点だと思っているところでございます。

今度は蓮如上人の方に移ります。いずれも「おどろくまじきことなり」とあります。無常の一場面ということですね。これも先立って、京都アニメーションの火災のことが話題になりました。ある布教団の研修会のときに、ああいうかたちで亡くなられた人たちはどう考えたらいいのかと聞かれるので、それは死に方を問わない。無常の一場面としか、われわれとしては受け止められないのではないか、と申し上げたことがあります。それを思い出しました。

『御文章』には「しかれども、今の時分にあたりて死去するときは」。このご時世に伝染病で亡くなったというの

は、生まれたから死んだというのではなくて、やはり伝染病で亡くなったんだと皆思うだろう。それも道理だと言うわけですね。

これは蓮如上人の一つの思いやりということでしょう。私たちの凡情に寄り添ってくださっていることを思います。そして、その上でこの凡情を目当てとされて、お救いの法義を立てられたのが阿弥陀さまのご慈悲だと、そうお示しになっているわけですね。

親鸞聖人も蓮如上人も、疫癘や伝染病によって亡くなっていくという現象については、無常の一場面と受け止められているわけです。説明論理としては、無常であって、特別な論理を立てておられないということを強調しておきたいのです。

ただし、『御文章』四帖目第十三通には、「これしかしながら業病のいたりなり」と、業病という言葉が使われています。しかし、この業病というのは註釈版でも示してありますように[3]、蓮如上人においては大変難儀なことだという程度の意味です。

少なくとも業病というのであれば、何の原因でどういう結果か、という因果論で示すものです。しかし、蓮如上人のこの『御文章』では因果論で示していないですね。過去の因がこういう結果を生んだという、因果論で示していないことが重要だろうと思います。

そこで次に、因果応報論の克服ということを書きました。こんにち医療従事者の方々などが差別的な偏見を受けていると言われたりします。それは病気にかかりたくないというお互いの保身から、医療関係者、リスクに立ち向かっておられる方々を遠ざけるという思いであって、差別的に見下しているのではないだろうとは思います。しかしながら、根底に巣くっている、根差しているところの論理はもう少しきちっと掘り下げる必要があるかなと思って、因果応報論という視点を少し提示してみました。

『日本霊異記』という古代の説話集のようなものがあります。いいことをしたらよい報いを受ける。悪いことをしたら悪い報いを受ける。非常に単純な因果応報論というものが示されているわけですね。それは日本古代の古い古い話で、歴史的にはまったく意味をなさないと簡単に切り捨ててしまえるかと言うと、必ずしもそうでもないと私は思います。

『日本霊異記』の論理というのは、こんにちから見れば、差別業論にすぎません。現在、悪い報いを受けているのは、過去の悪業によっていると。今の視点から見ると、差別業論そのものなんですが、当時においてはどういう意味があったかと言うと、いかなる権力者であってもこの因果の道理からは逃れられないという道理を示している。だからこそ当時の多くの民衆にとってこれが受け入れられ、また支えにもなったわけです。どんな権力者であっても、この因果の道理から逃れられないということに、当時の人たちは一つの支えを見出しました。

歴史的な視点を私たちが培っていくことの意味は、こういうことです。現在の感覚、現在の価値観から過去を断罪することはたやすいことですが、過去の断罪だけではなくて、過去の人々のこころを捉えていたということには、いかなる意味があったのかということを掘り下げるのが、歴史という学問の追究すべき視点なわけです。そういう見方をしていくことが歴史的な評価、歴史的な視座を持つことの意味だと私は思っております。

親鸞聖人にしても、蓮如上人にしても、こんにちの感覚で単純に批判したところで、大きな意味がないということだと思います。当時の時代においていかなる意味を果たしていたのかということを問わなければいけないと思います。

次の項目はハンセン氏病への差別論理。これは日本中世で言えば、らい病という、つい最近まで日本でも、世界でもそういう感覚に縛られていた部分があります。ハンセン氏病への差別論理は、中世では常識的に支配していました。中世の「起請文」には、「神罰冥罰各身、現世ニハ白癩黒癩得病」とあり、神罰を受けるということについ

て、現世にはこの身、この世においては白癩黒癩といった、らい病の報いを受ける。「後生ニハ堕無間地獄、永不可有出期状如件」という起請文の形式があったわけです。

起請文とは、誓いの言葉ですね。今からこれこれのことを約束いたします。この約束を仮に破ったとしたら、こういう報いを受けても何の不平もありませんという、誓いの形式が起請文だったわけです。

『法華経』の『普賢菩薩勧発品』には、「若実若不実、此人現世、得白癩病」とあります。『法華経』は、人間の平等というのを明確に説き示した経典であって、大乗仏教において非常に大きな位置を示しているものです。

その『法華経』において、不実であれば、その人は現世において白癩の報いを受けるという論理に縛られていたということがうかがい知れます。

もちろん、これは漢文経典ですから、翻訳の段階でこういう論理が混入されたということは十分考えられます。私は訳経史に詳しくはないんですけれど。「浄土三部経」で言えば、「五悪段」というところがあって、ここは差別業論みたいなものが出てくるところなんです。

親鸞聖人は、この「五悪段」についてどういう理解をされているかということを、若干ご紹介申し上げておこうと思います。

その前に、こんにちの訳経史の研究成果から言えば、「五悪段」は極めて異質です。ご存じのように、『無量寿経』には漢訳が五つ残っています。呉の時代の『大阿弥陀経』、後漢の時代の『平等覚経』、魏の時代の『無量寿経』、これは私たちが通例読ませていただく、『無量寿経』ですね。唐の時代に訳された『無量寿如来会』、宋の時代に訳された『荘厳経』、この五つがあります。

親鸞聖人は、お書物の中で『荘厳経』以外は引用されています。引用されているということは、ご覧になっていることは間違いないわけですが。5訳の中の最初の三つ、『大阿弥陀経』、『平等覚経』、『無量寿経』、これはいろい

ろなところで違いがたくさんあります。例えば四十八願が二十四願になったりしているなど、非常に多くのところで違っています。

ところが、「五悪段」に相当するところだけは奇妙にほとんど同文です。経典の翻訳がどういうふうになされていたかと言いますと、だいたいの経典は「詔を奉りて訳す」とあります。つまり、国王、皇帝の命令によって国家事業として翻訳がなされたということです。インドの言語を中国に訳している。これが国家事業としてなされた。国家プロジェクトとするわけですから、一人だけで個人的に訳しているのではないんです。だから、「詔を奉りて訳す」という言葉が入っています。

国家事業でする翻訳ですから、プロジェクトを組んだ。その中にはいろいろな班があるわけです。一つは仏教教義に明るくないといけない。

それから、二つの言語、インドの言葉と中国の言葉、両方に明るくないと翻訳はできません。何でもいいんですけれども。例えば、この本を私が持っていると、アメリカの人が「This is a book.」と言ったとすれば、本は英語ではbookと言うのかというのが分かります。つまり、同じ事象について違う言語をすり合わせていくというのが単純な翻訳です。

三つ目のパターンは、それぞれの国で、例えば、インドで用いられている概念が中国にない場合、中国の人にはどう訳せばいいのかということが問題になる。そのときに訳経家の人たちは中国なら中国の人に分かるような訳し方をする。つまり説明を付け加えるということですね。

ここからは私の想像なんですけれども。「五悪段」の部分だけが奇妙に共通しているということがなぜ起こったかというと、最初の『大阿弥陀経』を翻訳するときに、中国の人たちに分かるようにという配慮で、こういうふうに説明しておけば理解しやすいのではないかというかたちで、そのときは親切心で訳した。それが、結局、後の時

代になると、かえってあだをなしていると思います。

つまり、差別論理というものは、そういう中で混入してくるわけです。当時の多くの人たちに理解しやすいようにという親切心が、『大経』を訳すときにも、『大阿弥陀経』でそういうふうに訳した。次の訳もそれをそのまま受け継いだんです。そしてまた次の訳もほとんど同じように、この部分だけが極めて奇妙だというのは、そういう表れだと思います。親鸞聖人の場合は、こういう近代的な学問の方法を取っておられないんですけれども、『尊号真像銘文』というお聖教があります。その中に『大経』の「易往而無人」という言葉が引用されていて、この言葉の説明を『銘文』でなさっている部分があります。お浄土は「往き易くして人無し」。お聞きになったことがあるかもしれません。お浄土はなぜ行きやすいのかという理由を、「其国不逆違」。「その国」とはお浄土です。浄土というのは、逆はありません。逆というのは、一度悟ったものがまた迷いに戻ってしまうということはないということです。浄土に往生して、悟りを開いた者が、またこの迷いの境涯に戻って人々を教化する還相回向とは違います。還相回向の場合は、悟りを開いた者の慈悲の展開として、迷いの世界に戻ってくるということです。

この場合は、また迷いに転落してしまうということはありませんよというのが「不逆」です。「不違」は例外はありませんということ。磁石にくぎが引き付けられるときには、折れていようが、曲がっていようが、さびていようが関係ありません。折れている、曲がっているというのは人間の側が言うだけで、磁石にとっては何の関係もありませんね。それが「不違」。だから「易往」、お浄土には往き易いというわけです。

経典の上では、「無人」の理由については、経典の流れでは「しかるに世の人薄俗にして」、薄っぺらくて不急のことを争う。急がなくてもいいようなことばかりに右往左往しているということです。だから、「無人」なんだと。この具体例が「三毒」であり「五悪」だと。ここから後のことを全部省略しているわけです、親鸞聖人。それはなぜか。

もし、我々が薄俗である故に無人であったとしたら、悪人正機の法義に矛盾するんです。五悪の生き方だから浄土に往生できないとすれば阿弥陀仏の本願と矛盾する。その矛盾を親鸞聖人は見通しておられたから、これを「無人」の理由とはされなかった。

親鸞聖人は、『銘文』で言うと、「無人」の理由は「真実信心の人ありがたし」。真実信心が人はいないからだという。本願を信心するか、疑うか。これによって分かれるという、信疑決判の論理に撤したから、親鸞聖人はこれを相対化できたわけであります。

「浄土三部経」でも、翻訳の段階でこういうことが入り得ますから、『法華経』もこういうことがあり得るかもしれません。私は『法華経』の訳経史のことを詳しく存じませんから、何とも言えませんけれども。

親鸞聖人は比叡山で20年の間、まさしくこの『法華経』の経典を教わってこられた。それをずっと学んでこられたわけです。『法華経』の論理はいわば骨の髄まで染み込んでおられたはずなんです。しかし、親鸞聖人はこの差別論理を受け継いでおられないですね。なぜ疫癘で亡くなったのか。それを過去の因果論で説明するということを一切なさらなかった。無常の一場面としかおっしゃっていない。これはとても大事だと僕は思います。

一遍上人の『絵詞伝』というのがありますが、「制戒をも破らば」、もし戒律を破ったとしたら、「今生にて白癩黒癩となりて後生には阿弥陀仏の四十八願にもれ、地獄餓鬼畜生という三悪道に落ちて永くうかぶべからず」。一遍上人の『絵詞伝』にもこういう論理が出てまいります。ただ、これは一遍上人がおっしゃっている言葉だとは限りません。一遍上人が書かれたものは全部焼かれてしまっていますから。

ただ、中世の人たちはこういう理解であったということは裏付けられると思います。中世という時代は病にかかるということにおいても、因果応報で捉えようとしていたことがうかがい知れると思います。そういう中で親鸞聖人はこの論理をお取りにならなかった。それはとても重要な意義があると思いますね。

この因果応報論という業論、これは他者を評論するものであってはなりません。特定の他者についてその因果の道理を当てはめてはいけません。もともと業論というのは他者を評論するためのものではなかったんです。自らの業を見つめ続けてきたのが本来で、お釈迦さまが業論者だというのは、人は生まれながらにして尊いのではない。行為によって尊くなるんだというわけです。

自らの将来、未来は、自分が開いていくべきものだ。運命によって決定されているんだったら、行為の意味がありません。修行の意味もありません。お釈迦さまが行為論者、精進論者と言われるのは、決定論で理解してはいけないということをおっしゃっているわけです。従って、業というものの捉え方は他者に当てはめるものではありません。自己の内観として受け止めるものです。ただ、自己の内観と言っても落とし穴があります。内観だとしても自力の因果論であってはならない。一つの例として挙げたのは、有名な『正像末和讃』ですね。「無明長夜の灯炬なり　智眼くらしとかなしむな　生死大海の船筏なり　罪障おもしとなげかざれ」。

私は智慧の眼がくらい。私が罪深くて罪業が重いと。そのことを悲しみ嘆くということは、他力のご法義においてはあってはなりませんよということですね。この和讃のもともとの原形は親鸞聖人から言えば、法然聖人門下の兄弟子、聖覚法印のお言葉にあります。この聖覚法印のお言葉は、法然聖人が亡くなられた3回忌の法事の表白文として、聖覚法印が書かれたものであります。

聖覚法印はこの時代、唱導という、ご説法の本当に巧みな方だったわけです。書かれるものを読むと本当に涙があふれるような文章ですね。非常に文章に卓越した方ですね。親鸞聖人もおそらく法然聖人の三回忌というご縁の中で聖覚法印がよまれた表白を目や耳にされたことがあったのでしょう。それが親鸞聖人にとって非常に大きな意味を持っていて、聖覚法印の表白文を基に和讃をつくられたのがこれです。

「智眼くらし、罪障おもし」。こんな罪深い人間では救われないのではないのではないかと、自分で決めてはいけ

ませんということです。こんな罪深い身では救われることはないだろう。これは私が決めることではありません。もし私がそう思っているとすれば、阿弥陀さまの救いの力の方が、自分の罪業の力よりも劣っている。罪業の力の方が強いと思っているから、こういう思いが湧いてくるのです。

自らの罪深さに思いを致すことは起こりうるでしょう。しかし、こんな私では救われないと、私が決めているとすれば、それは阿弥陀さまの救いの願力を疑っていることになる。これを「信罪心」と言っています。罪を信ずるこころ。私たちは地獄一定の身で、迷いに沈み込む方向性しか持っていない。石は海に投げたら沈む方向性しか持っていません。しかし、その石を船の上に置いたら、石は沈まないんです。沈む方向性は一緒なんです。しかし、船の上に置いたら沈む重力よりも船の浮力の方が大きいから、船の上に置いた石は浮かぶし、進むこともできるわけですね。

私たちの迷いは、方向性からいけば、「地獄一定すみか」なんです。これが強いと思っていると弥陀の願船の浮力の方を信じていないということになります。生死大海の船筏、生まれては死に、生まれては死にということを繰り返していく、迷いの海の中において、沈む方向性しか持っていない私ではあるけれども、船に載せられたら船の浮力の方が強いから、自ら罪を抱えた身であることに変わりはないけれども、彼岸への、浄土への道を渡らせていただくことができる。これが親鸞聖人の和讃の論理です。

従って、業論が他者の評論ではないとしても、こういう自力の因果論になってしまったら、他力の法義とは合わないということも注意しておかなければいけないと思います。

次に「冥衆護持の益」のところを見たいと思います。親鸞聖人の『教行信証』信文類の中に、「現生の十益」、この世のなかでいかなる利益を恵まれるかということの第一番目に、「冥衆護持の益」というのがあります。「冥衆」とは、直接的にはおそらく天神地祇を指すわけですが、言葉の語義のとおり見れば、「冥」は暗いです。「衆」とは

存在。目に見えない存在というものです。それに対して恐れるに足らない。恐れる必要がないというのが「無碍の一道」というものです。

親鸞聖人の時代においても、あるいはお釈迦さまの時代も無論でしょうけれども。こんにちのような科学的水準ではありませんから、例えば、日食とか月食とか、これは今は、科学の論理で説明がついています。地球の陰によって月が隠れている。その科学的な根拠の分からない時代であれば、これを不吉の前兆としか考えられなかったと思いますね。しかし、科学的な知見によって、そういう不吉な前兆というものは解決できたという部分があります。

しかし、科学でも解決できないような迷いの在り方というのは、現在でも幾らもあります。迷信と言われるものはそういうものです。今ごろはどういう状況か知りませんが、かつて病室は4号室がなかったといいます。これは4という数字が死をイメージするから、音通するからということみたいですね。

これはごく最近、私が乗った飛行機、日本航空や全日空ではなかったんですけれども、ある地方航空に乗ったときに、私の座席番号が5番か6番だったとします。そうしたらたいてい前から並んでいますから、1、2、3といって、次は4かと思ったら4がないんです。5、6、7とずっと続いていくわけですね。その1、2、3はスーパーシートとか、プレミアムシートとかではない。普通に並んでいるだけです。非常口があるわけでもない。私は、客室乗務員の人にあえていじめることは避けましたけれども、何でここに4番がないのと言いたくなるぐらいでした。たぶん想像するにはこれしか思い浮かばない。病院の4号室がないのと一緒ですね。4は死を連想するから。客観的に考えてみたら、もし飛行機事故が起こったら、4番の人だけ死ぬなんていうことはあり得ないです。そんなことは分かっているはずなのに、この4という、死を連想するものを嫌がるという感性が私どもにはいまだにある。

友引で葬式をしたら、友を引くとか。でも友引は、もともとは共という字で、両方から引くという意味です。友人の友を書くから引かれるように思うかもしれませんが、両方から引く。だから意味自体は引き分けなんです。友引の前は先勝と言って午前中はいい。翌日の先負、これは午前中がよくないという、そういう論理で、間の友引はどっちでもありませんという、単純な引き分けというぐらいの意味です。だけど、友引だからと言って、翌日にしたら、お葬式は午前中にやりますね。午前中はよくないというでしょう。全く自己矛盾していますね。およそ迷信というものの正体はこの程度のことにすぎません。

科学で分かるはずですよ。人のいのちをあずかるような病院の病室で、あるいは金属の塊を空に飛ばそうかという科学の最先端にして、いまだに4が怖いのか。そういうものを横ざまに断ち切るのが横超他力の金剛心というものであって、それを「冥衆護持の益」というふうにおっしゃってくださっていると思う。さまざまな事象について原因がよく分からないものは、祟りだとか、罰だとか、そんなふうに持っていってしまう。それは正しい考え方ではありませんね。

では、次のテーマに移ります。コロナ禍およびコロナ後の伝道の在り方について。これは今回の共通テーマだと思いますが、私の与えられた持ち分からいって、親鸞聖人のお手紙や蓮如上人の『御文章』から、どのようなことが読み取れるかというところから、スタートさせてもらいました。

そういうことを踏まえた上で、私たちはこれから、どんなふうに向き合っていったらいいのかということを、少し模索したいわけです。

コロナ後と申しました。ワクチンが開発されつつあるというかたちで、専門家の方々によると来年の夏、秋ぐらいにはワクチンがほぼほぼ行き渡って、収束が見えてくるのではないかと言われてはいますけれども。

もし仮に一応の収束が見通せたとして、完全に元に戻れるかどうかということについては、非常に危うい部分が

多いと思います。伝道の在り方が今までどおりで済むのかということを少し考えてみたいと思います。

SARS、MERSのようにいつかはたぶん収束するでしょう。収束したとしても本当に元に戻れるかどうかということです。実はコロナ以前からも葬儀や法事の簡略化は進行していたと書きました。第10回宗勢基本調査の資料で見てみます。[4] 第10回でございますので、２０１６年段階でのものであります。

例えば、寺院の門信徒では年忌法要は通常何回忌までお勤めしていますか。現在と20年前、それぞれ最も多いものを次の中から選んでくれという質問項目なんです。４年前と24年前との対比ですから、丁寧にすれば24年前の表もなくてはいけないですけれども。私は、このときにはそういう頭が全然なくて、この４年前と現在とを比べようと思いました。つまり、４年前当時の現在と今というのを考えてみようかと思ったわけです。

その４年前当時、ご門徒さん方が何回忌ぐらいまで勤めてくださっているだろうかというものを全国平均のところで見ますと、一番多いのは50回忌までというのが51・１％、いずれにしても50％以上です。次が33回忌までというのが14％余りということになりますね。

今から４年前、コロナがある前だとしても、思い出してみて、こんなに勤めてくれていたかなと言うと、結構疑問符が湧くんですね。３年前ぐらい、つまり、コロナ以前においても、50回忌、33回忌、もちろんしてくださる方はあるんですけれども。３回忌、７回忌ぐらいが一番多いのかなといったような、ぼんやりとした実感があるわけですね。

隣の左側、これは葬儀に関しての問いで、家族葬が増えたとどれぐらいの人が感じているかと。これは全体の平均70％以上というふうになっていますね。４年前、完全にコロナ前ですね。この時点において全国平均ですると、７割近く、すでに家族葬が主流になっているわけです。

さまざまな事情がありますから、家族葬がいけないというつもりは毛頭ありませんし、現在であれば葬儀社もク

ラスターを出したくありませんから、たくさんの人に集まってもらうのを避けたいというのがあります。従って、近しい身内だけでやりましょうというのが、本当に定着しています。

コロナが収束したら元のかたちに戻れるかというと、元のかたちと言ってもこんな感じというわけで、私は危機感を抱いているわけです。

例えば、お通夜というのは、遺族の方にとっては本当に悲しい場であることは間違いない。その悲しい場においてお通夜という仏事を行うことの意味を考えたときに、例えば、グリーフケアという視点があったりします。また、自らが死に向き合うきっかけにもなるということもあります。

私が問題にしたいのは仏縁ということなんですね。つまり、故人を通してその故人の生前中の人間関係、あるいはそういうさまざまな交流を通して縁がある人が集まって、仏縁に遇ってくれる。これがお通夜というものの意味だと思います。葬儀もそうだと思います。

つまり、故人という存在が生前中に果たしてくれていたさまざまな社会的なつながりを通して、仏縁が広がっていくという側面がお通夜にも葬儀にもあるんです。それを完全に遮断してしまうのが家族葬という形態だと思いますね。

誰にも知らさずに、後から知りましたというかたちにしかならないのが家族葬です。生前中の故人の社会的な営みであったり、交流であったり、そういうものを全ていったん全否定するわけです。

そういう、仏縁の広がりを遮断してしまうのが家族葬という形態の大きな欠点だと私は思います。それでも近しい人だけでも集って、仏縁に遇ってくれることは大事だと思います。グリーフケアの側面で言えば、これは鹿児島の長倉伯博先生という方が、何かに書いておられた言葉を覚えているんですけれども。「氷はどんなに小さく砕いても氷は氷のままです。氷を溶かすことができるのは、ただぬくもりをもってするほかありません」。そういう言

葉を書いておられましたね。

ご遺族方の心中は悲しみで凍り付いているこころです。それに対してはどんな言葉やどんな理屈も無力なものだと私は思います。そういう中にあって、悲しみで凍り付いたこころを解かすことができるのはたった一つ、私はお慈悲のぬくもりしかないと思っています。お通夜の5分、10分という短い法話、お取り次ぎの中で、悲しみをいっぺんに解かすことは私の力量ではとてもできない。

しかし、仏さまのお慈悲をまずは伝えておく。そのことを少しずつ日がたってからでもいいから思い出してもらったときに、そのお慈悲のぬくもりで悲しみが少しずつ解けていく。

そのお慈悲のぬくもりが阿弥陀さまのお慈悲であると同時に、今はみほとけとなられた故人の慈愛が支えてくれる。そういったさまざまなお慈悲を伝える場として、お通夜も葬儀もグリーフケアの意義があると同時に、伝道の意味もある。亡くなった方がよりどころとされていたお念仏の教え、それを私たちも同じように歩んでまいりますという自己表明です。

葬儀というのは儀式ですから、儀式というのは成人式でも結婚式でも何らかの変化についての意味や意義を自己表明していく。それが儀式というものの本来の意味ですね。成人式なら子どもが未成年から成人になるということの変化の意義を自己表明する。結婚式だったら、独身生活から夫婦生活、家族生活といったような在り方の変化を自己表明する。

葬儀も、大切な方がもう目の前からおられなくなっていくということについて、私たちはどうあるべきかを自己形成していく場です。そのためにお勤めし、常日ごろ親しんでおられた『正信偈』を読ませてもらう。「本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき」、このご和讃を通して、故人の人生をたたえ、そして自らの人生の在り方も振り返らせていただく。そういう場が葬儀というものですね。

そのようにお通夜、葬儀というものは尊い仏縁なので、できるだけ広げてお勤めいただきたいと思うんだけれども、家族葬というかたちがコロナ以前においても主流である。そのことを考えると、本当に元に戻るんだろうかということについては、正直言ってどうしていったらいいのかという危機感があります。

でも、法座の形態の在り方、こちらもアクリル板を設定してもらって、飛沫を防ぐ。さっきも換気をしてもらったんだと思う。そして、距離を取ってもらったんだと思う。つまり、医学的な見地から最善と思われる方法を取って臨ましていただく以外にありませんね。

YouTube、動画法話の配信、これは対面の法座形式が取れなかったら、動画配信するということが考えられますね。今日ちょうど『本願寺新報』12月20日号が出まして、その中の紙面に、「安芸仏教音楽連盟がオンライン演奏会」というのを出してくださいました。出してくださったというのは、こっちが依頼したからなんですけれども。もし購読されておられる方は、お帰りになって見ていただいたらと思うんですけれども。

いつ収束するとも分からない不安に縛られている今こそ、仏教音楽の出番だと私は思っていまして、YouTubeの配信の中にテロップでそういう文章を書きました。YouTubeで、安芸というのは広島県の昔の地名ですね。安芸仏教音楽連盟というのを検索してもらうと、今、うちのコーラス団体だけがアップされていまして、下手くそだし、格好悪いし、とんでもない代物なんですけれども、アカウント数を稼ぎたいという邪心があるものですから、できればアクセスしてもらうとありがたいなと思う。そこで私もテロップで書きました。

先の見えない不安に縛られている。そういうときこそ仏教音楽。まず仏教ですね。熊本の布教使の先生で、吉村隆真という先生がおられるんです。先月ぐらいだったか、常例布教に来ておられまして、その方が「聴聞はこころのワクチン」という講題でお話をされましたですね。私はそのフレーズが気に入ったものですから、この間、特命布教使の研修会があったときに、吉村先生がおられたので、ちょっと使わせてもらいますと言って使ったのが、

「仏教はこころのワクチン」というふうに私はテロップに書いたんです。

仏さまの教えに遇うことで、どんな状況にあってもお慈悲に支えられた、先ほどの無碍の一道を歩むことができますという書き方をしましたね。お慈悲に出遇う。仏教に出遇う。仏教に出遇えば、コロナウイルスがどこかに行くという、そんな簡単なものではないんです。お念仏の教えに遇ったら、コロナが退散する。アマビエとか何とかのものが最近はやっていましたが、あんなもので簡単に退散できるものではありませんね。正しく向き合わなければいけないんです。正しく向き合い、正しく恐れ、そして正確な情報に基づいて乗り越えていかなければいけない。そういう中において、仏教がいかなる役目を果たすのか。

これも別の人が書いていた言葉ですけれども。仏教に出遇ったら、苦悩がなくなるわけではありませんと。しかし、苦悩に負けない、背負う力が恵まれる。そういう書き方をしておられた方がありましたですね。背負う力を恵まれるような教えに出遇うということなんです。正しく向き合い、正しく恐れ、正しい情報に基づいて乗り越えていく。これが仏教、仏さまの教えに出遇うということの意味だと思いますね。

ふさぎ込んでしまいそうなときに音楽は力になる。音楽はこころを和らげることができるし、また前向きな力を湧き立たせてくれる。そういう意味において、今こそ仏教音楽の出番だというのをYouTubeに配信してますので、今10人ぐらいの方がおられたら、帰ったら視聴回数が10増えていることを期待したいんですけれども。

ただ、これは扱うのが難しいらしいんですね。実は私も扱えないんです。アプリからYouTubeに行って、検索すればいいと、簡単に言うんですけれども。どうも私は原始人だからそれが駄目でうまくいかないんですが。よければよろしくお願いします。次にInstagram、これは宗派が今年の8月から一つの伝道のツールとして開設したものなんです。伝道ツールですから、日本国内だけではなくて、世界にも流れます。だから、こちらは旧国際部、今は寺院活動支援部国際伝道担当、ちょっと長い名称ですけれども、短い文言について英訳をお願いしているんで

す。こちら、国際伝道の方にはご迷惑を掛けているんですけれども。

そんなふうに英訳で発信すれば、既読のカウントが外国にもあるんです。外国の人が読んでくれたと。それだけで僕はうれしいですね。だから、英訳してくださっていて、短いフレーズですから、Instagram は長い文章は載りません。また長い文章だったら、今どきの方は読んでくれませんですよ。いわばテレビも新聞も読まないという世代の人たちには、長いお説教なんて到底受け入れられない。私の動画法話も5月の後半ぐらいにアップされましたけれども、アカウント数は見たくもないぐらいでした。どれだけ見てくれるか。最初の数分でもぱっと切られることが常です。だから、短い言葉で、短いフレーズで、どう人々のこころを打っていくかということを僕らも考えなければいけない。この一つが宗派の Instagram なんです。

ここから先なんですが。先ほども親鸞聖人や蓮如上人のことを、お手紙、『御文章』から見たように、こういう閉塞状態の中にあってこそ、蓮如上人の先進性に注目して、道を開く視点がないか。これが一つの提案なんです。蓮如上人の先進性とはいったい何か。『御文章』です。『御文章』の先進性。今までも文書伝道の一つの先駆みたいなことを言われていますけれども、ただにそれにとどまっていないと私は思っています。

その意味が、当時の正統な法義の伝承は口伝です。お師匠さまに付いて、お師匠さまからじかに教えを聞く。これが正統な在り方です。お師匠さんのいない法義の伝承が当時はなかったんです。

しかし、口伝は正確性において危うい。ここにリレーゲームと書きましたのは、小学校ぐらいのときに、6人か7人ぐらいの班で何班かに分かれる。先頭の人にちょっと長めの文章を紙で見せる。先頭の人はこっそり耳元で、口伝えで伝えていく。最後の人が黒板に、前の人から聞いた文章を書くんです。そうすると最初の人からどんどん変わってしまっていて、おおよそ原形をとどめないようなものになっています。これがリレーゲームというものですね。小学生と一緒とは言いませんけれども、口伝というものの危うさはこういうところにあると私は思います。

蓮如上人が『御文章』を書かれたのは、そういう点において極めて画期的です。蓮如上人ご自身が直接書いたものですから、間違える可能性はありません。仮に写本であって、写したとしても、目の前に現物があるんですから、正確性は段違いに担保されますね。その『御文章』というのは正確で平易と書きましたが、正確が一番重要です。

蓮如上人が『御文章』を書いて、各地の講中に送られる。そして、その講中では蓮如上人の『御文章』を読むわけです。文字の読める人が一人いたら、蓮如上人のお手紙を読むということにおいて、その場は一瞬にしてサテライト講義になるんです。

今の予備校のサテライト講義の先駆ですよ。超有名、超カリスマ講師の講義が同時に各会場で聴ける。このオンラインもそういうものですけれども。そういう先進性を持っていたのが『御文章』というものだと私は思っています。単純に文書伝道のはしりというぐらいのものではないと思うんです。サテライト講義の先駆者だと。そういうものを発見された。発明されたのが、蓮如上人の先進性だと思っています。

もちろん蓮如上人の『御文章』の原形には、親鸞聖人のお手紙もあったでしょう。しかしながら、親鸞聖人のお手紙というのは、どっちかというと、個別具体的指示ですね。例えば、造悪無碍といったようなことが起こったら、こんなことではいけませんよといったような、個別具体例に対する指示がなされるのが親鸞聖人のお手紙の基本型です。

しかし、蓮如上人の『御文章』は同じ手紙の形式、『御文章』というのはお文のことですから、文というのは手紙という意味です。蓮如上人から各地の講中に当てたお手紙は、浄土真宗の基本的な講義を短い言葉に定形化して、それを各地の講中に伝える。そこでは字が読める人が一人おれば識字率が高くない当時においてですね、読める人が一人いさえすれば、その場は一瞬にして蓮如上人のご説法の場になるんです。

そういう画期的な先進性が私はあると思いますから、そういう画期的先進性を今の時代であれば、どういうふう

にすればそれができるのか。科学が発達しましたから、こういう科学的手法を取れば、今のオンライン講義でも、動画配信でも、そういうものを撮って正確に正しくご法義が伝わるという在り方を、蓮如上人は考えてみましょうという提言を私たちにしてくださっていると思いますね。

『御文章』は単純な文書伝道という意義だけで片付けてしまったら、僕は蓮如上人に申し訳ないと思います。当時の考え得る知恵をはたらかせてくださって、できるだけ多くの人に、しかも正確に教えが伝わるにはどういう方法が考えられるか。その知恵を絞ってくださったのが一つの『御文章』というかたちで示してくださった。その精神を今の私たちはどういうふうにすれば可能なのか。多くの人に浄土真宗の教えが正確に正しく伝わっていくにはどういう方法が考えられるのかということを、今の科学の水準にのっとって考えていかなければいけない。その提案を私たちは蓮如上人から受けていると思いますね。

次に新しい様式と書きました。何か今ごろはニューノーマルとか言うんですか。国際部の人にこんなことを言ったら悪いんですけれども、ノーマルという表現は本当にいいのかなと思うんですね。ノーマルがあるということはアブノーマルもある。何かそれはちょっと気になるなと思うんですが。

それはともかく、内容をどう伝えるかを考える。ツールの問題はさっき言いました。内容をどう伝えるのか。変わり得るものと、変えてはいけないもの、これをきっちり見据えないといけないですね。

伝道の方法にはさまざまな工夫がなされる。蓮如上人の『御文章』のようなかたちで、そういう意味を、ＩＴ技術を活用していく。確か昨年のこの恵範講座では研究所の佐々木義英和上さんが、「ＡＩ技術の光と影」という題でお話をされておられましたので、そういうのも活用しなければいけないと思う。

教義・教学で工夫の余地はないか。ここでも私は蓮如上人に学ぶべきものがあると思っているんですね。その実例が平生業成なんです。平生業成という言葉は親鸞聖人のお書物には見られない用語なんです。だから、時々蓮如

上人や覚如上人は親鸞聖人の教えに過不足を加えているという。教えをゆがめていると、そんなふうに評する人がおられますね。しかし、決してそうではない。決して過不足を加えているわけではない。同じ内容は親鸞聖人の上では現生正定聚と同義なわけです。

当時は浄土宗の鎮西派等を通して臨終業成というのが一般的に理解されていた。臨終の死の場面において、今までどんなことをやってきたかと。いいことをどれだけしたか。悪いことをどれだけしたか。こういう臨終で清算して、行き先を決める。要は単純明快な論理です。

けれども、先ほどの『御消息』で見ましたように、そこで決まるのではないというのが親鸞聖人の論理でしたね。臨終に関わりないんだと。平生聞信の一念のときに、私の正定聚は定まるんだと。それが現生正定聚という法義です。

ちなみに申しますと、『本願寺新報』で誰だったか、現生正定聚というのを大学に合格した人の思いだと言って書いておられるのを、私は覚えているんですね。私はそれを勝手に援用してしまって、うちの四男が大学に合格した途端にバイオリンを弾き出した。勝手に借用してすみませんでしたという、おわびが申したかったんですけれども。

しかし、現生正定聚という親鸞聖人の法義と平生業成という法義は意味が同じです。平生聞信の一念において、正定聚不退の位に住する。浄土宗鎮西派の人たちに浄土宗の人たちが臨終業成と言っていた。臨終にそれぞれのそれまでの善と悪をどれだけやってきたかによって、臨終で清算しましょう。

来迎をなぜ求めるか。今までやってきた善業が死ぬときになって三愛と言って、自体愛。自分は死にたくない。そして境界愛。家族や財産と別れたくない。置いていきたくない。三つ目が当生愛。死んだらどうなるかが怖い。この三つが起こったら、これまでの善業がぱあになる。白紙になる。だから、そのときに白紙にならないように阿

弥陀さまの来迎を願って、観音、勢至の二菩薩等のお出迎えがあって、それでこころ安らかにいのちを終えたら三愛が起こらないと。そのために来迎を求めたんですね。

親鸞聖人はそういう在り方ではないと。平生聞信の一念において、正定聚に決定するということだから、臨終待つことなし、来迎たのむことなし、ここにすわることができたわけです。浄土宗鎮西派の人たちに説明することは、今申し上げたような親鸞聖人の論理で説明できますが、今私が申し上げただけでも、かなりややこしい、かくかくしかじかでこうだからという手順を踏まなければいけませんでしたね。

それを蓮如上人は平生業成という一発で対立軸を示したんです。これ一つで親鸞聖人の現生正定聚という内容が表せる。臨終業成という当時の一般的な理解に対して、一発で対立軸を示したのは、平生業成という言葉によってだと私は思います。だから、過不足を加えているのではないんです。親鸞聖人の教えを正確に、しかも当時の人たちに一発で響く、そういう内容を示されているのが平生業成という法義なんだと思いますね。

つまり、蓮如上人はここで私たちに提起してくださっているのは、その時代を正確に見据えて、今の時代においてはどういう言葉が響くのかということを、蓮如上人が果たしてくれたような臨終業成に対する一発の対立軸を示されたように、今の混迷の私たちにとって、苦悩の真っただ中にいる私たちにとって、最も端的にその苦悩に応えていく。そういう教義・教学というものをたずねなければいけないと私は思います。今の時代の苦悩の様相には、さまざまな要素があると思います。親鸞聖人、蓮如上人の時代と、時代が異なります。混迷の様相もおそらく異なっているだろうと思います。

一つ、二つ、私も思うのは、キーワードは、生きづらさであったり、居場所がないであったり、孤独ということだと思いますね。

都会では人口が多いですけれども、人間関係はむしろ希薄と言っていいかもしれない。隣のうちに誰が住んでい

るのかも分からない。同じマンションでありながら、言葉を交わしたこともない。知らない間に隣の部屋の人が孤独死をしていた。かなり日常茶飯事的にこういう状況が起こっています。人口が多くても、むしろ人間関係は希薄で、孤独に苦悩しているのが一つの現代の様相のキーワードかと思っています。

そんなときに私たちはどんなことが提示できるか。思い巡らせたのは、一つは神戸大学の中井久夫先生が阪神・淡路大震災のときに、中井先生は神戸市のお医者さんですから、被災された方はもちろん、その被災された方を救おうという立場の人に、医者としてどうやったら力になれるんだろうかと、支える側の人たちもこころが折れそうになっている。

そういう中において、中井先生は、「そばにいてくれるということ」。そうおっしゃっていましたね。「コ」っていうのは協同という意味ですね。生活協同組合のコープとか、コオペレーションとか。「プレゼンス」というのは、存在と言ったり、出席と言ったり。直訳すれば、共存とかという具合に訳せるんですけれども。それを中井先生は「そばにいてくれるということ」と訳されたんです。

罹災で苦しんでおられる人も、またそれに向き合っている人たちも、どうしたらいいか分からない。自分一人で引き取っていても、解決の道は見いだせない。そういうときにお互いが支え合って、そばにいてくれるということが安心感になると。そういう提言を中井先生がされたんですね。

一人ではありませんよということと同時に、「そばに」というのは過干渉しないということでもあるんです。相手の自立をどう育んでいくかと。それをそばに寄り添いながら、相手の自立をどう育んでいくか。しかし、一緒に乗り越えていきましょうねということを示したのが中井先生のこの訳語だと思っています。

お経の中で言えば、『涅槃経』という経典に「月愛三昧」というのがあります。これも説明しだしたらきりがないんですけれども。結論だけ言います。仏さまのお慈悲を月の光に例えているわけです。真っ暗な山道を旅人が進

んでいる。今は真っ暗という実感が得にくいと思いますけれども。コンビニもなければ街灯もない。本当に真っ暗ですよ。

そういう旅人が山道を歩いているときには、不安と恐怖が襲ってきます。不安と恐怖の山道を歩いている旅人が、突然雲の切れ間から月の光が差し込んだとする。そのときに旅人は安心と勇気を恵まれる。そう書いてありますね。旅人にとっては孤独な夜道であることは変わりがありません。しかし、月の光に照らされることによって、安心と勇気を恵まれる。それを仏さまのお慈悲に例えているわけであります。

今、コロナ禍の中で、先の見えない不安。これに変わりはありません。しかし、仏さまのお慈悲に照らされることによって、安心と勇気を恵まれていく道がある。お通夜なんかでもよく使う話ですが、いとしい方が目の前からおられなくなる。その事実に変わりはないけれども、お念仏申す一声一声の中には、阿弥陀さまのお慈悲に照らされている。そしてまた、今はみほとけとなられた故人さまの慈愛に支えられている。それが月の光に例えられていることの一つの一面ではないかというような話を申し上げました。

今、私たちが仏さまの教えに出遇うということは、この厳しい現実が、COVID-19 があっという間にどこかに行ってしまうということはあり得ないんです。しかしながら、月の光に照らされることによって安心と勇気を恵まれて、正しく向き合い、正しく恐れ、乗り越えていくということを確認できるのではないかと思っています。

阿弥陀さまのお慈悲で言えば、摂取不捨です。おさめとって捨てない。逃ぐる者を追わえ取る。こっちを向いたときだけ救ってあげましょうという仏さまではない。私たちがどこを向いていてもずっと追い掛け続けてくださる。そういう仏さま。そして一度取りて長く捨てない。一度お慈悲の御手に抱かれたものは必ず仏にならせていただく。

『涅槃経』で言えば月愛三昧、お釈迦さまの教化の在り方。そして、阿弥陀さまの摂取不捨のお救い。そういっ

たことを私たちは今の孤独の真っただ中にある方に、響いていくような言葉で紡いでいかなければいけないと、私が思うことなんですね。

同じような言葉をステレオタイプのように伝えていって、もちろん、それが響く人もいるでしょう。だけど、何のことやらということも当然起こり得るんです。

苦悩に沈む、苦悩に苦しんでいる。そういう方々にいかにしてそばにいてくれるという仏さまのお慈悲を伝えることができるか。これが私たちに課せられている使命かなと思っています。非常に雑ぱくな話に終始してしまいましたが、ここでいったん私の話を終えさせていただこうと思います。長時間お付き合いいただきましてありがとうございました。

【註】

（1）『浄土真宗聖典』〈註釈版第二版〉７７１頁
（2）『浄土真宗聖典』〈註釈版第二版〉１１８１頁
（3）『浄土真宗聖典』〈註釈版第二版〉１１８４頁
（4）『第10回宗勢基本調査報告書』（二〇一七年七月発行）